

# 平成 22 年度事業方針

社会福祉法人四天王寺福祉事業団

大きく移り変わって行く制度と年々厳しさを増す社会環境の中で、我々は措置時代に描かれた法制度に則ったサービス提供の実践ではなく、創業時と変わらぬスタンスを持ち利用者満足と利用者が抱える問題の解決に貢献でき、それが職員の成長と満足につながる自立した一連の事業を目指して推進して行かなければならない。

三位一体である「労務・サービス・財務」の 3 本柱の強化に取り掛った一つに、先ず法人に於けるコーポレートガバナンス（健全且つ効率的に不正やミスを起こさぬよう法人にて基準を定めて業務を行うシステムであるインターナルコントロールを初めとしてコンプライアンス等の不正防止、資金の管理・調達方法の確立等々）を確立させる為に、経営リスクモデルを開発して内外のルール等の遵守性を点検しているが、まだまだ体質的な問題もあり今後も重点的課題として取り組まなければならない。

二つ目の取り掛かりとして経営計画書の運用が挙げられる。

これは、顧客満足をサービス設計に落とし込み、現場参画により職員満足（働き甲斐）の向上を図り、加えて経営安定化、役割資格等級制度に定める役職者の役割と責任による経営計画立案や実施責任と管理等の実行精度に於ける向上並びに日々の実績データ管理を行う仕組みとしている。

従前までは事業を経験と知識の切り売りによって推進していたものから、顧客のニーズにあった金銭を支払う価値のあるサービスの開発に取り組み、推進していく為である。が、運用に至るにはまだまだ手法の理解が不足しており、現状はスキルや経験不足もさることながら、収入の心配をしなくてもよい事業やそれに慣れてきた体質が未だに深く影を落としている。

畢竟、我々は前年度以上に肅々と PDCA を積重ね、集約・累積・積算根拠に基づいた予算と計画を立案し、業務能力とサービス提供能力の開発と向上を目指して経営計画書の完全実施に向けて取り組んでいく事を最重要課題に掲げた年としなければならない。

三つ目は法人機能の醸成である。経営リスク部会、悲田院建替えプロジェクト、人事プロジェクト、財務、労務、研修、苦情解決委員会（ホームページ担当兼務）、医療施設連絡会では、各施設の精鋭職員が現場の情報を生かし活動している。この経験が知識と協働意識向上につな

がっており、機会とチャンスとラポール形成の場として活動を推進していく。

部門Ⅰ（高齢・保育母子施設）と部門Ⅱ（障害施設）では、毎月会議を開催し、財務分析（財務会計、管理会計）を行っているが、経営計画書の実効性を可視化し経営体質の改善に取り組んでいく。

「守・破・離」中の「破」から「離」へと飛翔する今、「離」とは所謂、四天王寺福祉事業団独自のスタイルを創造し確立すべき時期にさしかかっているので、「生み（開発と向上）の苦しみ」は必ず伴う謂わば必定の理である。

昨年度に出されたキーワードの一つにある「自律」は、法人が目指しているガバナンスの確立に不可欠の要素であり、且つ前述した「破」から「離」に伴う「生み（開発と向上）の苦しみ」には不可欠の存在であり、これを必ず乗り越えて行かなければならない。

この一連の「自律」をキーワードとした取組みは、極論すれば、利用者への適切な福祉サービスを行う為にサービスの標準書の作成スキル向上に、時間、工程、価値等の科学的分析手法を用いて客観的な分析を行い、これが「労務・サービス・財務」のマネジメントに結果として帰着する訳である。

且つ、大きく変遷して行く中でも永きに亘り法人の「宣言」を具現化せんが為に「経営」という文言が大きな意味を持って存在するのである。

ここで従前の如く独善的、自己肯定的なスタンスに逃げると「永きに亘り法人の『宣言』の具現化」には程遠く、先人が苦勞して各時代で築き上げてきたものを、手前勝手な理屈で誤魔化し、単純に消耗していくのみであり、断じて方向を違えてはならない。

措置制度への悪しき依存体質からの脱皮を目指して、四天王寺独自のスタイルを創造し確立すべき今、「自律」というキーワードが大きな意味を持つ。

我々を取り巻く世の中の価値観、環境、経済等々が変わって行く中で、「永きに亘り法人の『宣言』の具現化」に取り組む現在、「試練に立つ自主管理」を認識して試行錯誤をしつつ、四天王寺福祉事業団独自のスタイルを作り上げて行く中で、昨年来痛感した不可欠な要素は「自律」であり、「自律」こそをキーワードとして肅々と取り組む一年としたい。